熊野の森から

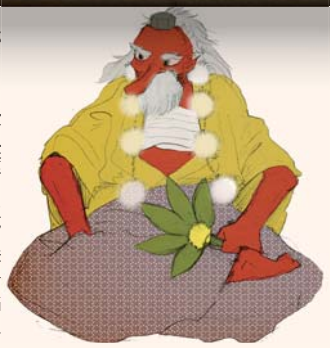
怪しの熊野

其の四十六

「那智勝浦の怪異（その1）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

これまでのコラムでは、個別の妖怪や怪異に焦点を当ててきた。すでに五十種類は紹介できたろうか。妖怪は場に取り憑くモノだということからすると、どこで、どんな妖怪が出没するのか？という視点は、妖怪探しの過程の中では外せないポイントになる。このため、今回からしばらくは、妖怪の出没する、出没した場所に焦点を当てて紹介していくことにする。その第一回目は、筆者が頻繁に通う那智勝浦町を取り上げる。



那智山に出没し、修行中の花山法皇を悩ませた天狗。陰陽師の安倍晴明に封じ込められた。（イラストはＢｏＢｏ）

那智勝浦町は、ご存じの通り青岸渡寺、那智大社のある那智山があり、山で暮らしていた妖怪達は、開山後は霊力や法力で封じ込められたようだ。その代表としては、那智山で修行中の花山法皇を悩ませた天狗が挙げられる。この天狗は陰陽師の安倍晴明に封じ込められ、その後は、那智山の行者に懈怠（けたい）があればたちまち出て煩わしい害をなす神的な存在となったいった。このためか、地域に残る獅子舞には必ず天狗が登場し、神的な役割を担っている。清明の痕跡は、今でも那智山に残る晴明橋でみることができる。その他では、海沿いの狗子ノ川には小天狗峠という地名がある。

那智山の奥で旅人や村人を襲った「ひとつダタラ」。身の丈は約九メートル、目がひとつ、手も足も一本の怪物で、樫原の狩場刑部左衛門に退治された。刑部については、樫原に居を置いた平家の落人、上総五郎兵衛盛清であったという話が有力ともされるが、安宅氏の関係者であったという話も大塔村に残されている。（イラストはＢｏＢｏ）

那智山の奥に出没した「ひとつダタラ」も外せない存在だ。身の丈は約九メートル、目がひとつ、手も足も一本、旅人や村人を襲う怪物であった。腕に自信のある何人かの武士が怪物退治に山へ入ったが、帰ってきた者はなかった。そこで、樫原の狩場刑部左衛門が村人の困惑を見かね、激闘の果てに怪物退治する。この話は柳田圀男が紹介し、一本ダタラとして全国に知られる妖怪となった。その出没原因として、鉱山との関係を指摘する人は多い。刑部左衛門やタタラの痕跡は、樫原の狩場刑部左衛門記念碑や大野の色川神社にみることができる。

ところで、青岸渡寺や那智大社のある那智山であるが、大雲取山、烏帽子山、光ケ峯、妙法山など那智川の源流域を構成する山々の総称であり、那智山という単独の山があるわけではない。また、那智大社は、かつては那智神社、熊野夫須美（ふすみ）神社、熊野那智神社などと名乗っており、昭和三十八年に熊野那智大社と改称して今日に至っている。これらのことを知らない人は意外に多い。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。